

小学校 第5学年 国語科書写 学習指導案

東京学芸大学
准教授 草津 祐介

- 単元名** 文字の大きさ（漢字と平仮名）——『登る』（2時間）
- 単元のねらい**
- 漢字と平仮名の大きさに気をつけて、配列を整えて書くことができる。
 - 漢字と平仮名の大きさに気をつけて、硬筆で字形を整えて書くことができる。
- 本時のねらい** 字形を整えるために適した漢字と平仮名の大きさを理解することができる。（第1時）
- 指導時期** 9～10月

本時（第1時）の展開

	活動内容	デジタル教科書・教材の活用
導入	● 「指導者用デジタル教材」の初期画面を開いてコンテンツを起動する。 本時の目標を知る。 ● 字形を整えるために適した漢字と平仮名の大きさの違いについて学習することを理解する。	 ● 目標を黒板へ掲示する。 漢字と平仮名をどのような大きさに書いたら読みやすく書けるか考えよう。
展開	『登る』を毛筆で書いてみる。（試書）	● p.24の運筆動画を見せて、児童に書くよう促す。 以下のように一文字ずつ進めるとよい。 ①「登」の運筆動画視聴 ➡ ペン機能を使用し、筆順を確認する。 ➡ 児童に書くよう促す。 

	活動内容	デジタル教科書・教材の活用
展開	試書と教科書の文字を比べて話し合い、発表する。 ●「漢字と平仮名のつり合いをとるにはどんな大きさで書くとよいか」問いかけ、考えるよう促す。 ●平仮名は漢字よりも小さめに書くつり合いがとれることを理解する。 『登る』で漢字と平仮名の適した大きさについて考える。	②「る」の運筆動画視聴 ➡ ペン機能を使用し、筆の動きを確認する。 ➡ 児童に書くよう促す。  ● 運筆動画は、児童が書いている間、モニターに映し続けるとよい。 ● 話し合いの結果を試書に書き込むよう指示する。 漢字と平仮名の大きさ 平仮名は漢字よりも小さめに書くつり合いがとれる。 ● p.25のシミュレーションを児童それぞれが実際にやってみる。または、児童の反応を確認しながら教師が操作してもよい。大きさを変え、視覚的に最適な大きさを考えさせる。 
まとめ	『登る』を練習する。 本時のまとめ書きをする。 本時のまとめ書きを撮影する。 試書とまとめ書きを比較し、自己評価をする。	● p.24のポイント動画を使用して復習する。 書いている間は、運筆動画を流しておく。  ● 各自の端末のカメラ機能を使用する。 評価 ※評価カード等を使用 漢字と平仮名のつり合いを理解し、書いている。(知識及び技能)

①目標を示す。

(黒板)

②試書をする。

運筆動画を視聴し、ペン機能を用いて筆順を示す。

③教科書教材および試書を用いた話し合いをする。

漢字と平仮名の大きさについて考えさせる。
シミュレーションを児童に操作させる。

④本時のまとめ書きをする。

ポイント動画を視聴する。

● 運筆動画活用の効果

従来の書写指導は、教科書掲載の教材を見て、そっくりに書くという字形指導が主になっていた。その背景には、書写の学習では、教科書掲載の教材（従来は「手本」といわれてきたもの）そっくりに書くものだ、という意識があるのではないか。しかし、これからの書写指導は、「書く」という行為そのものに着目し、指導する必要がある。運筆動画を積極的に使用することによって、始筆・送筆・終筆の角度から筆圧の強弱やリズム等、さまざまな学習要素を、視覚的に学習できるのではないか。また、運筆動画を常に流しておくことにより、児童の学習進度に応じた対応も可能になる。

● シミュレーション活用の効果

漢字と平仮名の大きさを考える際、これまでは「平仮名（などの画数の少ない文字）は漢字よりも小さめに書く」という、場合によっては漠然とした学びにとどまっていたと考えられる。しかし、シミュレーションを使用することにより、実際に文字の大きさを変えながら思考することで、どのくらいの大きさがよりよいのか、視覚的にメタ認知をして学ぶことができるようになる。そのことは、漢字と平仮名の相対的な大きさに気をつけて書いた場合の効果を、児童が実感として理解することにもつながるのではないか。これはデジタル教材を使用する意義であり、従来の指導では得られなかった学習効果ではないかと考える。

● 書写の学びとデジタル教材

書写は、文字を正しく整えて書くこと、手で書くことの楽しさを学び、コミュニケーションの一つに手書きを位置づけることを目指す学習領域である。その書写の目標を達成するために、デジタル教材を効果的に活用すると、より主体的な学びにつながるのではないだろうか。